

1938年黄河決潰事件と『新黄河流域図』
1938 Yellow River Flood and
“Shin-Kōga-Ryūikizu (Maps of New Yellow River)”

荒武 達朗

I はじめに

明治より第二次世界大戦終結までの時期に、日本が戦争や植民地経営の為に作製した地図を外邦図と称する。本稿はこの外邦図の1種である『新黄河流域図』（1940年1月12日）の作製の背景と過程を整理し、その史料性格を議論することを目的とする。

中国を対象とした外邦図は2万5千分の1、5万分の1、10万分の1等の縮尺の地形図が作製され、辺疆を除く本土全体をほぼ包括している。ある時期までの中華民国、そして最近にいたるまでの中華人民共和国において大縮尺の地形図は軍事機密に属していた為に利用することが困難であった。現在は衛星画像と地図がインターネット上に公開されるようになり、かつてのような不便さは解消されつつある。しかしながら近年の急速な経済発展につれて中国大陸の景観はその面貌を大きく改めつつある。過去へと遡及した分析を行う為には、たとえそれが僅か20年前のことであっても、この外邦図に頼らざるを得ない場合がある。中国研究における外邦図の価値は今なお非常に高いのである。

合計27枚の図幅からなる『新黄河流域図』は、1938年6月の黄河決潰により南流した河道を描いており、外邦図の中でも特殊な性格を具えた地図である。中華民国の参謀本部陸地測量総局または参謀本部河南省陸地測量局が1910年代から30年代にかけて作製した5万分の1地形図を原図として、その上に航空撮影と偵察（1939年9月12日）及び陸上偵察によって得られた情報を青色と赤色で書き込んだものである。表1はその中の各図幅が何時、どの機関によって作製されたかを整理している。原図のもっとも早いものは民国6年（1917年）、遅いものは民国25年（1936年）の刊行とされている。これを1938年（7月?）に日本の陸地測量部が複製し、さらに北支那方面軍がその上に上述の偵察情報を反映させて1940年1月に印刷したのである。これが『新黄河流域図』であるが、各図幅の配置関係は図1を参照されたい。「原武県」の×印が決潰口であり、ここから黄河は南流した。『新黄河流域図』はその新しい河道に沿って各図幅を配置している。最も南東に位置する「秋渠集」「界首集」「双浮屠」の3枚の図幅が筆者のフィールドである安徽省太和県に当たる。

本図は国内外の各機関に収蔵されるが、その所蔵状況の全貌は未だ定かではない。防衛研究所所蔵分はアジア歴史資料センターのサイトを通じて公開されている⁽¹⁾。ただし南部の9枚分、すなわち「清河驛」「周家口」「淮陽県」「鄆城集」「水寨」「魯台集」「秋渠集」「界首集」「双浮屠」の各図幅が欠落している。加えて画像全体が大きすぎる為4分割して撮影されており、全

表1 『新黄河流域図』各図幅作製時間

図幅名	原図作製時間・部局	北支那方面軍(多田部隊)測量班作製時間
孟 県	民国21年5月測図 22年8月製版 22年9月印刷 參謀本部陸地測量總局	昭和15年1月複製
孟津 県	民国12年11月測図 25年10月迅速複製 參謀本部河南省陸地測量局	昭和15年1月複製
孝義 鎮	民国20年6月調査 23年10月製印 參謀本部陸地測量總局	昭和15年1月複製
汜水 県	民国20年6月調査 23年10月製印 參謀本部陸地測量總局	昭和15年複製
温 県	民国12年測図 20年正月迅速複製 ?	昭和15年1月複製
広武 県	民国20年6月調査 23年10月製印 參謀本部陸地測量總局	昭和15年1月複製
原武 県	民国20年7月模繪製版 20年7月印刷 參謀本部陸地測量總局	昭和15年1月複製
鄭 原	民国12年測図 20年6月迅速複製 參謀本部河南省陸地測量局	昭和15年1月複製
中牟 県	民国11年測図 22年5月迅速複製 參謀本部河南省陸地測量局	昭和15年1月
瓦 坡	民国20年製版	昭和13年陸地測量部複製 昭和15年1月再複製
朱仙 鎮	民国20年製版	昭和13年陸地測量部複製 昭和15年1月再複製
尉氏 県	民国24年11月測図 25年12月撮影製版 參謀本部陸地測量總局	昭和15年1月再複製
通許 県	民国6年測図 11年繪図 24年7月迅速製印 參謀本部河南省陸地測量局	昭和15年1月再複製
底 閣	民国7年測図 24年2月迅速複製 參謀本部河南省陸地測量局	昭和15年1月複製
官 庄	民国20年製版	昭和13年製版 昭和15年1月複製
呂 潭	民国20年製版	昭和13年製版 昭和15年1月複製
常 營 集	民国20年製版	昭和13年製版 昭和15年1月複製
大新 集	民国20年製版	昭和13年製版 昭和15年1月複製
清河 驛	記載なし	昭和15年1月複製
周家 口	民国9年測図 24年2月迅速複製 參謀本部河南省陸地測量局	昭和15年1月複製
淮陽 県	民国10年1月測図 19年8月迅速製印 河南省陸軍測量局	昭和15年1月複製
鄆城 集	民国10年測図 19年8月迅速製印 參謀本部河南省陸地測量局	昭和15年1月複製
水 寨	民国11年測図 24年2月迅速複製	昭和15年1月複製
魯台 集	民国11年5月測図 24年2月迅速複製	昭和15年1月複製
秋渠 集	民国11年5月測量 24年2月迅速複製	昭和15年1月複製
界首 集	民国11年測図 24年3月迅速複製	昭和15年1月複製
双浮 屠	民国25年測図	昭和13年7月陸地測量部複製 昭和15年1月再複製

体像をつかみにくい。最も利便性が高いのが科学書院の『中国大陸五万分の一地図集成』に収録されるモノクロの複製版であり、本稿でも図1で全体の構成を把握するためにこれを用いた。以下、本稿では「リプリント版」と称する⁽²⁾。ただし図幅によっては余白部分に書かれている図編名、附注などが複製に際して消されている点に留意しておく必要がある。また以上のアジア歴史資料センター公開分、リプリント版はともにカラー版の原図をモノクロ複写したものである為に、地図上の情報を正確に読み取れないという欠点もある。原図は航空測量と偵察で得た情報を青色で、陸上偵察でのそれを赤色で記している為、白黒では両者の判別がつかないのである。

国外での所蔵状況についても述べておきたい。今里悟之・久武哲也両氏の報告により本図がアメリカの議会図書館にも所蔵されていることが明らかとされた⁽³⁾。これは第二次世界大戦終結後にアメリカによって接收され、後に同館に収蔵されたものであるという。この点に関して2016年秋の段階で大阪大学名誉教授の小林茂氏、甲南大学文学部の鳴海邦匡准教授、議会図書館に勤めておられるミーンズ節子女史により同館に一連のシリーズとして揃っていることが改めて確認された。接收資料の内、重複分・余剰分については米国内の各機関に分配されたのだが、ワシントン大学の田中あずさ女史によれば『新黄河流域図』の一部、「周家口」「大新集」「清河驛」「淮陽県」の4枚の図幅がワシントン大学に所蔵されていることが判明している。

まずこの3種の地図、①アジア歴史資料センター (<https://www.jacar.go.jp/>) 公開分、②リプリント版、③ワシントン大学所蔵分について書誌情報の簡単な比較を行う。まず①は『陸支密大日記』所収の「新黄河流域図送付ノ件」に含まれるものである。文書の冒頭に以下の3通の照会文が添付されている⁽⁴⁾。まず1940年1月29日多田部隊（北支那方面軍）発、陸軍次官阿南惟幾宛「新黄河流域図送付ノ件通牒」に次のように記されている。なお本稿では史料の引用に際して適宜常用漢字に改め句読点を補っている。

「昭和十四年九月十二日撮影セル新黄河流域空中写真ヲ五万分一図ニ作業セル「新黄河流域図」別紙ノ如ク送付ス 尚同図ハ印刷ノ関係上先ヅ中牟一朱仙鎮附近ノモノヲ完了セルニ付取り敢ズ送付シ残部ハ今後印刷完了次第逐次追送スル豫定ナリ。」

続いて同年2月14日、陸軍省宛「新黄河流域図追送ノ件」に

「一月二十九日付方軍調秘第三八号ヲ以テ送付セル新黄河流域図中孟県一中牟間印刷完成セシニ付キ送付ス 尚残部ハ印刷完了次第送付ス。」

とあり、さらに2月18日、陸軍省宛「新黄河流域図追送ノ件」に

「一月二十九日付方軍調秘第三八号及二月十四日方軍調秘号外ヲ以テ送付セル新黄河流域図印刷未了中ノ残部送付ス。」

とある。このように印刷の完了した『新黄河流域図』は、まず決潰点近くの「中牟県」から「朱仙橋」までの3枚、続いて「中牟県」以西の「孟県」までの図幅、そして残部というように順次少なくとも3回に分けて陸軍省へと送付された。ただし前述の通りアジア歴史資料センターでは南部の9枚分が公開されておらず、所蔵状況は不明である。

シリーズとしてまとまっているのが②のリプリント版である。残念ながら地図の標題「新黄河流域図」、地図番号、(昭和十四年九月十二日撮影空中写真ニヨル)という青色の但し書き、

各図幅の一関係を示す配置図、及び註記例の二、三、「昭和十五年一月十二日 多田部隊参謀部調製」の各記載事項が複製に際して欠落している。もともとの収蔵機関については、其九「中牟県」の右肩に捺された所蔵印・受領印から1940年1月に東亜研究所に送付・所蔵されたものであることが判明する。これを議会図書館所蔵の「中牟県」の図幅と比較すると、この所蔵印の位置・形状が一致した。このリプリント版は議会図書館に収蔵されたシリーズの複製であることに間違いない。

③のワシントン大学所蔵分には右肩に「東亜研究所蔵書之印」がはっきりと捺されているので、これもまた東亜研究所への送付、同研究所収蔵分であった。②との関係は、其十二「周家口」の図幅に捺された所蔵印の位置が異なっているので、それぞれ別のものであると確定できる。本図は少なくとも2セットが東亜研究所に収められたのだろう。③は、地図の右下の欄外に「Map Division/3 JUN 1965/Library of Congress」（スラッシュは改行を意味する）という方形の印が捺され、さらにその上に抹消処理が施されているのが見える（後掲図10）。いったん議会図書館に収蔵された後、重複する③が分配の対象としてワシントン大学へ収められたと考えられる。この③についてはすでに大阪大学人文地理研究室、外邦図研究グループ発行する『外邦図研究ニューズレター』11号所収の小林茂「ワシントン大学・ハワイ大学からの外邦図収蔵の報告」に要を得た解説があるので参照されたい⁶⁾。

以下、本図作製の背景については、その価値を知る上で重要である為、節を設けて詳しく述べることとする。

II 1938年6月黄河決潰事件

1937年12月の南京陥落後の戦局において、当初大本営は事変不拡大方針をとっていた。その一方で北支那方面軍と中支那派遣軍はその前面にて活動する中国軍に対処する要望を強くしており、この意向に沿うようにして戦線が拡大された。徐州周辺に集結しつつある中国軍を殲滅し抗戦意識を挫折させるという目的の下で、徐州作戦が4月3日に内定、7日に下令された。戦史に言う徐州会戦は5月19日に徐州を陥落させることで目的の一つを達成したものの、中国軍の包囲殲滅には成功せず、引き続き西方に向けて追撃戦へと転じた。大本営は蘭封以西への進撃を制限していたが、5月24日に当地を占領後、更に開封（6月6日占領）、中牟（6月7日占領）、尉氏（6月4日占領）と、戦線は西へと拡大し河南省の重要拠点、鄭州へと迫った。

6月12日夜、中国軍は中牟北西17kmの三劉砦及び鄭州北方15kmの京水鎮附近で黄河南岸の堤防を決潰させた。中国ではこの後者の地点の名を取り「花園口決堤事件」と称する。この為、黄河の水はこれより南へ流れ、中牟、尉氏を占領していた日本軍は洪水の中に孤立、西方への進撃はこれにより停止した⁶⁾。水は約1ヶ月かけて安徽省阜陽近くまで到達している。

この人為的に起こされた事件について、国防の観点からは功罪相半ばする評価が下されるであろう⁷⁾。しかし当地の行政機関並びに人びとのこの作戦に向けるまなざしは一概に厳しい⁸⁾。安徽省太和県は『新黄河流域図』の最も南東側の部分であり、決潰地点より遙かに離れているが、その影響を大きく受けた。1993年に刊行された地方志、『太和県志』所収の「1938～1945

年黄泛紀要」は次のように述べる⁹⁾。

「1938年6月、国民党は日寇（日本軍）の西進を阻み、中原地域と中国西南の後方地区を保全する為に、河南の中牟、鄭県両所で黄河の大堤防を切った。滔滔たる黄河の流れは、建瓴水を直下し、賈魯河を突き、潁河・渦水に注ぎ、分流して淮河へと入った。氾濫地域は寛さ80華里（約40km）に達し、長さは1千華里（約500km）余りに及び、被災面積は8万平方華里に達し、被災人口は2,000万人余り、財産の損失は数える術もなく、歴史上において人間の手によって引き起こされた重大な災害となった。」

これにより太和県の94%が被災し、日中戦争終結以後まで人びとは水害に苦しむことになる。

「1938～1945年黄泛紀要」はさらに次のように続く。

「太和県の土地は痩せて民は貧しく、住宅は多くは泥土で建てたものであり、黄河の水がひとたび到るや、たちまちに倒壊してしまった。1942年万福溝上流で堤防が破れ、附近の方樓寨に水が入ると、数時間の内に寨（村）内の住宅は70%以上が倒壊した。その為に氾濫区の大数の村落では、一部の建物すらも残らず、水が引いた後は茫々たる曠野となってしまった。1938年の水害は面積は広がったが、水深が浅く源が遠く流れは緩やかであったので、溺死者は比較的少なかった。これ以後の何年もしばしば堤防が破れ、決潰口近くでは水の勢いが激しく、溺死者は比較的多かった。水が引いた後、溝も河も井戸も池も多くが埋もれてしまい、道路もまた無くなってしまい、道行く人の泥沼に落ちて死ぬ者がはなはだ多かった。八年の氾濫期間で、全県で溺れ死に、泥に埋もれて死に、倒れた家屋に押しつぶされて死んだ者は2,000人余りにのぼった。黄河の洪水期間、毎年外地へ逃れた被災民は10万人余りに達した。1959年太和県地方志編纂委員が洪山大隊で調査を行ったところ、1,180戸中、一年中災害を逃れて乞食をした者は1,008戸に達し、子女を売ったものは112戸に及んだ。李興区于趙庄では黄河の水が来る前には105人いたが、水が来た後には65人となり、多くは外地で餓死したという。……。」

筆者は2015年10月に同県西北にあるS村を訪問した。村はずれにあるS家の祠の碑文には次のように記されていた。

「本地のS氏一族は相伝えるに山東の棗荘より移民してきた兄弟2つの家族であり、1家族がG鎮に、1家族がS村に分居した。それから長い年月が経ち、加えて1938年に蒋介石が黄河の花園口を破り洪水を起こし日寇の南進を防がんとして、十年に及ぶ最大級の水害をもたらした為に家屋が破壊され帰る家もなくなったこと、土地改革にて土地契約文書を焼いたことなどの要因で、我々には家系を調査すべき族譜がないという事態になった。」

このように、1938年6月に端を発する黄河の南流が多くの被災民を産み出したこと、また村落や家屋に甚大な被害を与えたことが述べられている。この1938年の黄河決潰事件は国民党が引き起こしたこととして、中国大陸では比較的自由に論ずることの出来るテーマである。それ故に関係する文献は数多く出版され、そこから事件とそれが地域社会にもたらした影響の詳細を知りうるのである。

III 『新黄河流域図』の作製

日本軍は作戦行動を円滑に進めるべく、黄河の氾濫直後よりその実態調査に乗り出した。北京航空兵団の発出した「航空兵団情報記録」には6月から7月にかけて行った航空偵察の概要が記されている。6月18日「航空兵団情報（地上）第三〇〇号」には「黄河氾濫ニ依ル浸水ノ状況」という報告が掲載され、尉氏・通許近辺の洪水の状況、洪水の南端が周家口に達していることが記されている⁽¹⁰⁾。28日「同（地上）第三一〇号」も「黄河氾濫状況」として朱仙鎮から通許までの範囲の概況を報告している⁽¹¹⁾。翌29日「同（地上）第三一一号」の「黄河氾濫ノ状況」も通許附近の洪水の状況、水が通許東南方向5km、陳留東南方向約10kmに拡がっていることを述べる⁽¹²⁾。さらに翌日の30日「同（地上）第三一二号」には6月12日から25日にかけての情報を記入した「京漢線東側大別山以北地区ニ於ケル情報蒐集要図」が収録されている。この地図は各地の橋梁、集積物の有無、滑走可能地の存否などの情報に加え、洪水の概況を描いている（図2）⁽¹³⁾。その地図の収録範囲は黄河から安徽省太和県までを含んでいる。7月に入ると

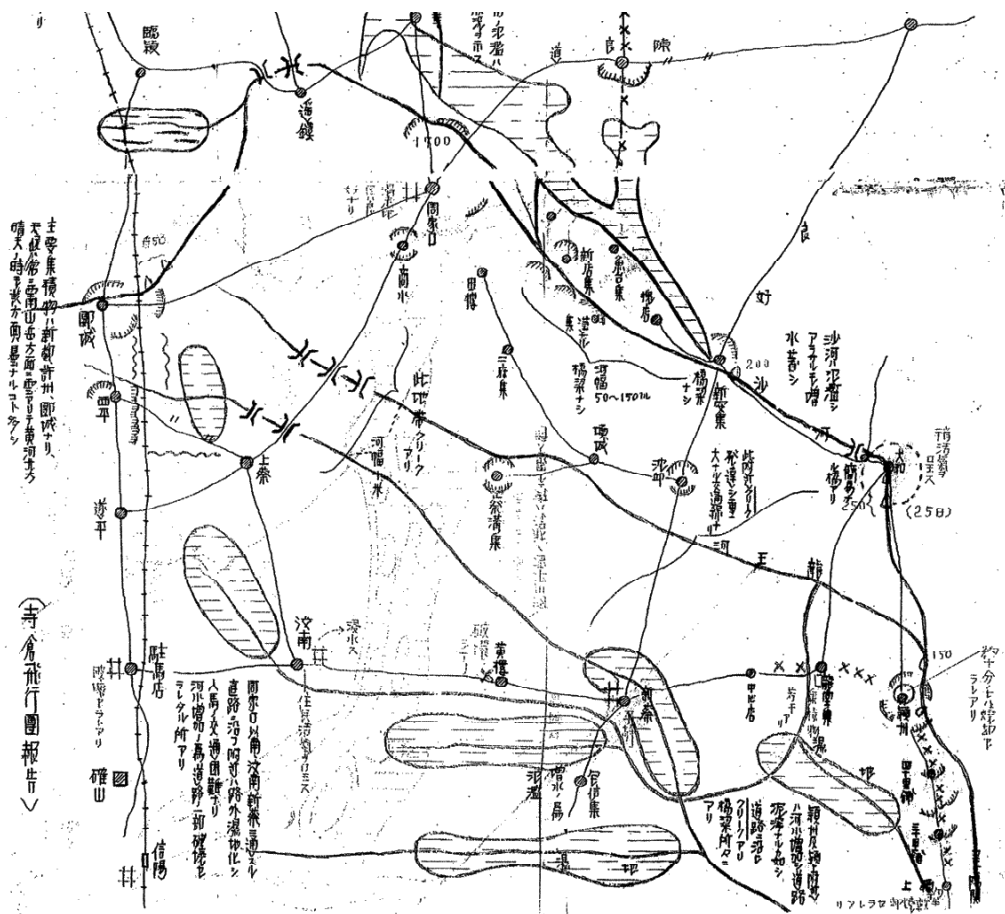


図2 京漢線東側大別山以北地区ニ於ケル情報蒐集要図

航空偵察の頻度は減少し、7月18日の「同（地上）第三三〇号」ではより下流に位置する安徽省蚌埠近辺、7月20日「同（地上）第三三二号」では淮河と渦河の洪水の状況が簡単に述べられるに止まる⁽¹⁴⁾。その後、後述する7月23日「同（地上）第三三五号」以降、年内の「航空兵団情報記録」には洪水に関する報告は見られなくなる。

そして北支那方面軍は洪水発生直後から調査研究を行い報告書を少なくとも3回出している。先ず決潰から1週間後の6月19日付けで第1回目の研究報告「今次黄河破堤ニヨル氾濫推移ニ就テ」が作成された⁽¹⁵⁾。

「本報告ハ開封一鄭州間ニ於ケル今次黄河氾濫ノ将来ニ関スル見透シノ参考トシテ六月十六日迄ニ於ケル現況ヲ基準トシ既往ノ各種資料ニヨリ図上ニ於テ研究セルモノニシテ……。」この報告書は6月16日までに寄せられた情報に基づいて、洪水の今後の予想される流路を検討している。種々のデータと併せて「氾濫流路推測図」及び判断の材料として国民政府が民20年の水害について作製した「民国二十年淮河流域浸水情況図」が添付された。前者の「氾濫流路推測図」は北支那方面軍参謀部第二課が1938年5月29日作製した地図に基づいて、第三野戦測量隊が再度作製、6月20日に印刷したものである。本図には6月17日と18日の偵察情報も加味して決潰口の状況と6月15日時点の洪水の到達点、その後の流向と流量の予測を示している(図3)。

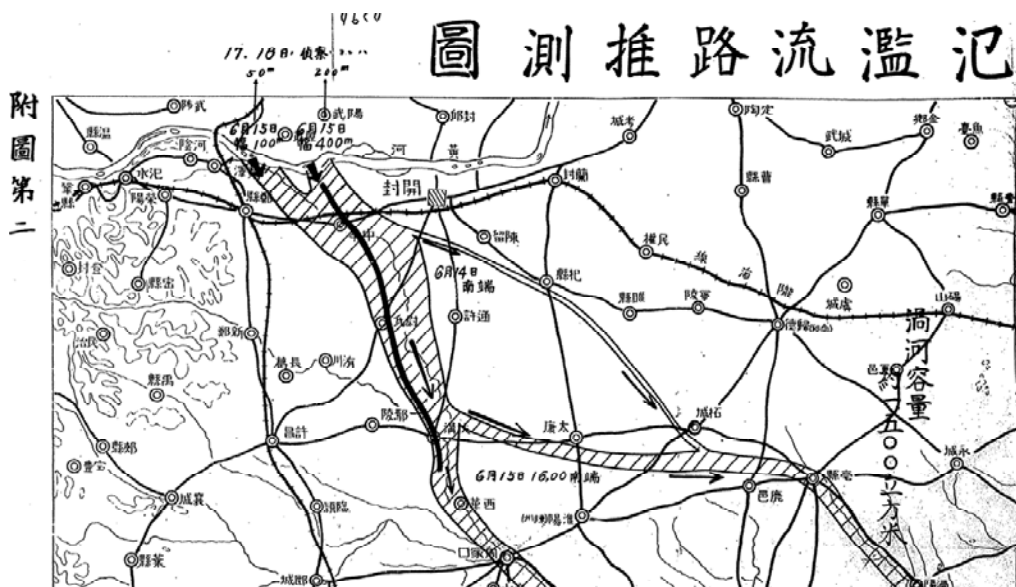


図3 氾濫流路推測図

続いて北支那方面軍司令部が昭和13年9月25日に刊行した方軍地資第三三号「黄河氾濫其後ノ変化ニ就テ（兵要地誌資料）」を見てみよう⁽¹⁶⁾。

「本文ハ当軍司令部地誌班ニ於テ九月二十日迄ニ得タル諸情報ヲ綜合整理シタルモノニシテ昭和十三年七月十五日調整『第三次研究報告・今次黄河破堤ニヨル氾濫推移ニ就テ』附氾濫ノ概況ノ其後ニ於ケル変化ヲ示セルモノナリ。」

先に引用した6月19日作成の第1回目の研究報告の後、残念ながら第2回目の報告が何時作成さ

れたかは分からないのだが、7月15日に第3回目の報告書が作成されたことになる。3回目の報告書の後、9月20日までに集められた情報をまとめたものがこの「黄河氾濫其後ノ変化ニ就テ」であり、次のように偵察の情況が述べられる。

「一、現況ノ詳細ハ不明ナルモ、漸次其氾濫区域並水深ヲ減シ、北部ニ於テハ京水鎮及三劉砦附近ヨリ中牟ヲヘテ賈魯河―沙河―潁河流域ヲ南下シ其主流ハ概ネ一條トナリ、幅員約十軒乃至約五軒ノ水深大ナラザル氾濫地帯ヲ生ジ、所々徒渉シ得ル状態ニアリ。南部ニ於テハ正陽関附近ヨリ下流淮河流域ニ氾濫シアリテ、淮河本流ハ水深相当ニシテ舟運ニ便ナルモノノ如シ

其細部ハ附図第一、第二ニヨル

二、開封附近並淮河蚌埠鉄橋付近ハ直接軍ノ戦闘行動ニ大ナル関係ヲ有シアルヲ以テ比較的細部ニ亙リ具体的ナル偵察ヲ実施セルモ大〔太〕和一潁州―潁上方面並蚌埠以東ノ地区ニツキテハ偵察不十分ナリ。」

そしてこの報告の後には7月以降の情報を書き込んだ附図一「黄河氾濫経過要図」（図4）と附図二「黄河氾濫経過要図（其二）」（図5）の2枚の地図が添付されている。図4は1938年7月12日北支那方面軍調整の25万分の1の概略図（詳細不明）を基にしている。その上にその後の変化



図4 黄河氾濫経過要図（1）

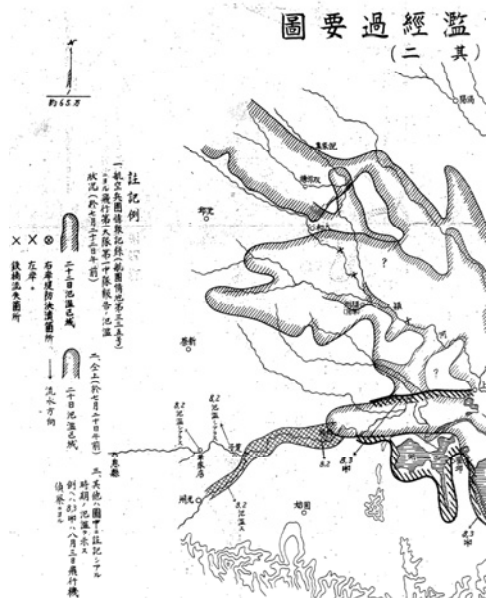


図5 黄河氾濫経過要図（2）

を記入し9月20日に改めて作製された。これにより流水が7月8日に安徽省太和県に達したというような各地の洪水到達時間など詳しい情報が読み取れる。その情報源となったのが8月から9月にかけて行われた地上偵察（K情、KK報告、密偵報）、更にトンボ状のマーク（図4の中央やや右上、9月4日情報の日付の下に航空符号がある）で示される航空偵察である。Kとは騎兵、KKは騎兵集団を指しており⁽¹⁷⁾、密偵は新黄河対岸の国府軍支配地域からの報告であろう。図5は

北京航空兵団司令部が7月23日に陸軍省へと送付した「航空兵団情報記録（地上）第三三五号」に添付される「渦河潁水河淮河氾濫状況要図」（7月22日9時50分～11時20分時点の情報）を基に作製したものである⁽¹⁸⁾。「航空兵団情報記録」所収のものは50万分の1の縮尺であるが、図5の方は65万分の1として作製されている。ここに添加された情報は主に8月3日に行われた航空偵察によるものが中心となっている。その範囲は『新黄河流域図』の範囲で言えば最も南東部に位置する「双浮屠」よりもさらに東の部分、安徽省北部が中心となっている。

続いて9月25日以降10月20日迄の状況は方軍地資第三八号「九月以降ニ於ケル黄河氾濫ノ変化ニ就テ」という報告書にまとめられている⁽¹⁹⁾。

「一、九月以降軍ノ作戦行動ニ直接関係大ナリシ開封西方地区及扶溝以南太和附近以北ノ地区ハ比較的詳細ナル情况ヲ知り得タルモ中牟以西ノ地区・周家口西方地区並太和附近ヨリ下流淮河沿岸ニ関スル情况ハ不明ナリ

其細部ハ附図第一第二ニヨル」

そこに添えられた附図がそれぞれ「開封附近氾濫経過要図」及び「淮陽附近氾濫経過要図」である。先に紹介した図4「黄河氾濫経過要図」（昭和13年9月20日作製）と同様、各種の偵察記録を書き込んだものである。標題の通り開封と淮陽近郊を中心として、25万分の1の概略図上に陸上偵察（KK報告など）の情報が書き込まれている。

あけて1939年2月11日、杉山部隊（北支那方面軍）参謀部第二課により方軍地資第五号「黄河決潰口偵察報告（主トシテ三劉砦）」が作成された⁽²⁰⁾。

「一、偵察経過 イ 二月六日 浅谷大尉・佐藤大尉・立神大尉ハ飛行機ニヨリ新郷ヲ経テ京漢線黄河鉄橋附近ニ出テ黄河北岸ヲ東進京水鎮並三劉砦決潰口ノ空中偵察ヲ行フ 高度約千米

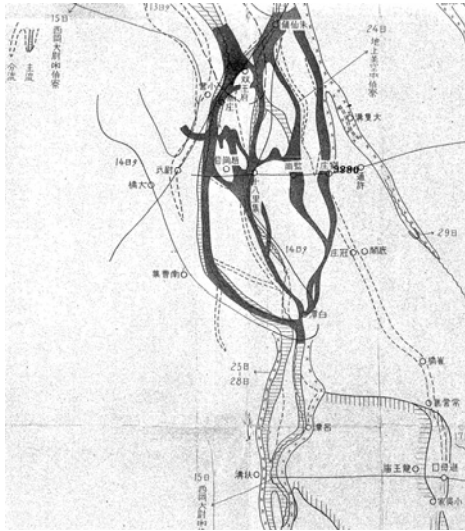
ロ 二月七日 開封警備隊ノ掩護ノ許ニ上記人員ノ外河野少佐並開封特務機関長以下及建設署関係者同行『トラック』ニヨリ北堤一幸砦ヲヘテ三劉砦決潰口ノ地上偵察ヲ行フ

二、偵察結果 イ 全般ニツイテ（附図第一参照） 昭和十四年一月二十日空中写真撮影結果ニ示サレアル如ク（二月一日測量班調整印刷五万分一図）黄河ハ其全河水京水鎮ニ於テ東南流シ新黄河トナリ京水鎮・三劉砦間ハ僅小ナル溜水或ハ伏流ノ元黄河河道ニ点在シアル程度ニシテ三劉砦決潰口ニ於テハ殆ド流水ヲ見ズ 三劉砦ヨリ下流全ク流水ナク一面ノ沙漠地帯ノ如キ觀ヲ呈セリ 但シ柳園口渡場ノ上流ニ若干ノ溜水アリ」

附図として10万分の1の「黄河決潰口偵察要図」と「三劉砦決潰口平面図」「同見取図」「同断面図」が添付される。ここで注目になるのが1939年1月20日の空中撮影の結果に基づいて2月1日に測量班が5万分の1図を作製したという事実である。これが本稿の取り扱う『新黄河流域図』（1939年9月12日撮影、40年1月12日作製）といかなる関係にあるかは判明しない。同図と同様の試みが約半年前の1月から2月にかけて行われていたのは興味深い。この2月1日作製の5万分の1の地図については現在のところ未確認である。

この後、報告書としてはこれまでの記録のまとめのような体裁を帯びるようになる。例えば1939年7月7日北支那方面軍本部作成の方軍地資号外「昭和十三年度ニ於ケル新黄河氾濫経過概況（其一）」には次のように記されている⁽²¹⁾。

「一、本概況ハ昨年度ニ於ケル新黄河ノ氾濫ニ関スル諸情報ヲ綜合整理セルモノナリ（要図二枚） 二、ナホ昨年九月上旬ヨリ十月下旬ノ間ノ情況ハ其二トシテ後日配布ス」
 この報告書（其一）は1938年6月12日の氾濫直後から9月にかけての概況整理である。後日“其二”が作成・配付されるとあるが、目下未発見である。この附図一「昭和十三年度新黄河氾濫経過要図（其一）自六月中旬至六月下旬」は6月15日の航空偵察、24日の地上偵察をもとに推察を加えたものである（図6）。附図二「同（其二）自六月下旬至九月中旬」は8月26日、9月4日の航空偵察、加えて8月、9月の地上偵察の情報を添加している（図7）。その範囲は開封より安徽省太和県近郊の光武廟までを含み、おおむね『新黄河流域図』の扱う氾濫区域に相当する。



← 図6 昭和十三年度新黄河氾濫経過要図(1)



↓ 図7 昭和十三年度新黄河氾濫経過要図(2)

北支那方面軍調査班によって作成された方軍調査第六九号附編「新黄河飛行機偵察報告附録写真集」（昭和14年11月15日）は1939年7月27日に作製された地図に、空中より撮影した写真を貼り付けたものである⁽²²⁾。その一部を図8として掲げた。本稿主題の『新黄河流域図』の作製

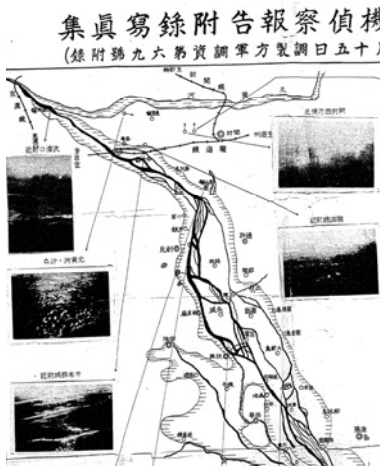


図8 偵察飛行写真集

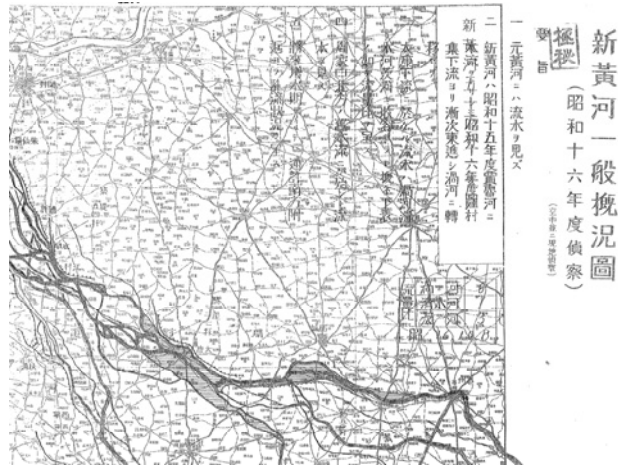


図9 新黄河一般概況図（1941年）

はこの後に行われた。

当該図の描く内容と史的価値については本稿のまとめとして「おわりに」で述べることにするが、氾濫した黄河の全体像を描く地図もほぼ同時期に作製されている。本稿執筆中にアメリカの議会図書館に1939年12月北支方面軍参謀本部作製の『新黄河一般概況図』が収蔵されているとの情報を提供された。こちらは『新黄河流域図』よりも約1ヶ月はやく印刷された。また北支那方面軍が1941年の陸上偵察・航空偵察に基づいて作製し、1942年2月6日に陸軍次官へと送付した『新黄河一般概況図（昭和十六年度偵察）』も同種の地図であるが、こちらの包含する地域は39年の『新黄河一般概況図』よりもやや狭い（図9）⁽²³⁾。図1の『新黄河流域図』は河道の一本を描くのみであるが、図9によれば氾濫を起こした黄河は毛細流となって淮北を流れていたことが分かる。それは本稿冒頭で見た『太和県志』の記す災害の状況を如実に表している。以上の各種地図の相互の関係についての考察は今後の課題としたい。

IV おわりに：『新黄河流域図』の史的価値

以上が『新黄河流域図』作製の背景と過程である。1938年6月12日の黄河決潰の後、航空偵察、地上偵察が繰り返され、情報が集積された。その都度簡便な25万分の1等の縮尺の地図に情報を書き込んだ概略図が作製されてきた。それより大きな縮尺のものは現在の所未発見であ

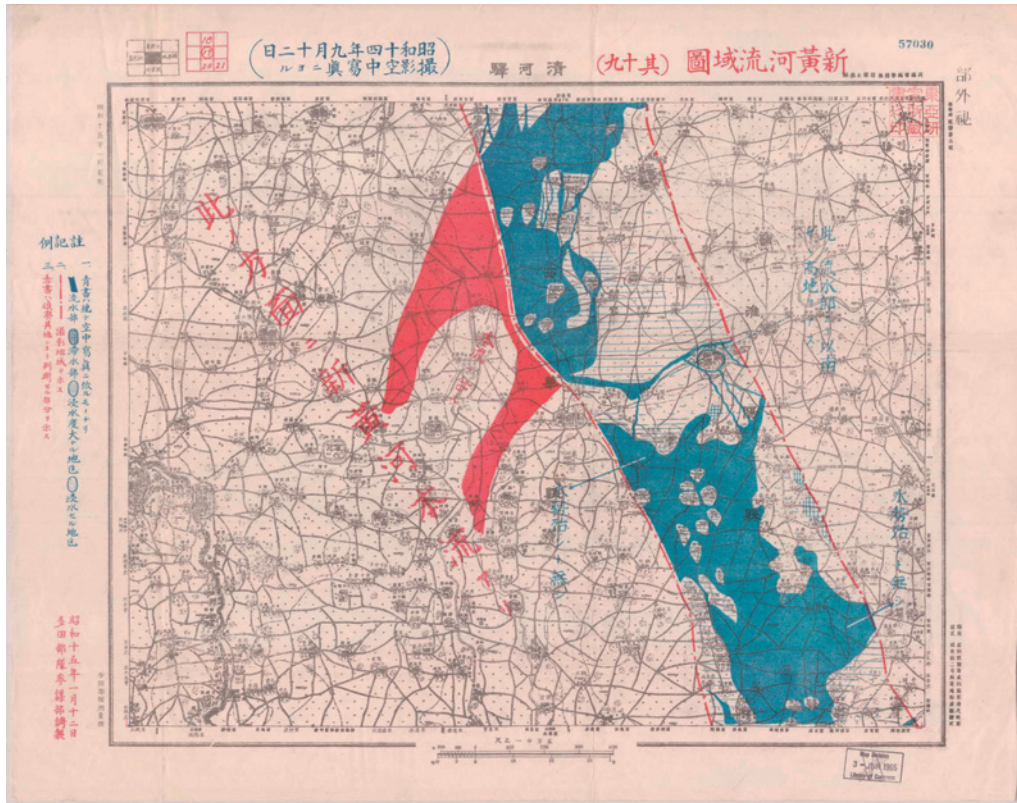


図10 新黄河流域図・新河驛

るが、1939年1月から2月にかけて一度作製された可能性がある。その後1939年9月12日に航空測量が行われ、中華民国による5万分の1の地図を原図に各種情報を記入して1940年1月12日に作製されたのが『新黄河流域図』であった。

ここではワシントン大学所蔵分（カラー版）に基づいて当該図の史的価値を論じ、本稿のまとめとする。所蔵4枚の内、本図の特徴を端的に表していると考えられる其十九「清河驛」を題材とする（図10）。この図幅「清河驛」の位置については前掲図1を参照されたい。

本図の基となった9月12日の空中写真とはどのようなものなのか。図上の破線で挟まれた部分はその撮影地域であり、幅約4kmの帯状に南北に延びている。その間は青色で情報が書き込まれている。欄外に「青書ハ総テ空中写真ニ依ルモノナリ」と記載され、これが航空測量によって得られた情報であることが判明する。またその破線外については赤色で各種情報が記入されており、同じく欄外に「赤書ハ偵察其他ニヨリ判断セル部分ヲ示ス」とあり、地上偵察による情報であることが分かる。前節で引用した様々な概況図と報告書もまた航空偵察と地上偵察を組み合わせた情報を総合して作られた。

改めて図10を見ると、青色の帯の左側（西側）に赤色で「此ノ方面ニ新黄河本流アリ」と記入されている。このことから航空測量は新黄河全体、或いは本流に沿って実施されたのではなく、この辺りではその河流の左岸部分すなわち北東岸に沿って、おそらく北から南へと飛行し実施されたものと考えられる。これより北の図幅では必ずしも左岸に限定されずに撮影が行われている。この左岸は日本軍支配地域の境界であり、新黄河の対岸は国民政府の統治する地域であった。両者の対峙はその後しばらく続く。その均衡は1944年春、大陸打通作戦（一号作戦）の発動後、日本軍による新黄河の渡河作戦によって破られる。『新黄河流域図』は日本軍支配地域の外縁を描くものであり、その兵要地誌資料としての価値もそこにある。

『新黄河流域図』は1938年に人為的に起こされた黄河決潰後の河道を示しており、その被害の一端を分析する上で大きな価値を有している。もともと村落が点在し耕地の広がっていた平原を黄河の水が飲み込んでいく様をはっきりと目にすることが出来る。本稿で引用した諸史料と中国側で出版されている膨大な数の文献とを対照させることで、日中戦争下の河南省・安徽省の社会の実像を解明する手がかりの一つとなるだろう。

このように戦禍に伴って発生した災害を描写する本図であるが、伝統中国の地域社会研究、水利史研究においても高い価値を有することを附言しておきたい。まず巨視的な角度から言えば、歴史上何度か発生した黄河の改道について、その具体的なイメージを提供してくれる点を挙げたい。特に12世紀の南宋・金の時期に発生した黄河改道は、北流から南流へと大きく流路を変えたことで知られている。本図の対象とする地点から東にずれているものの、淮北地域での改道と洪水の実態を考察する糸口を提供してくれるのである。

微視的に本図を検討すると、地図上の青色部分にいくつかの区分がなされているのが見える。地図の左欄外の註記によれば青一色は流水部分、青の格子は滞水部、横線は浸水度大なる地区、点で示された部分は浸水した地区とされる。もともと標高差のほとんど無い地域に流れ込んだ黄河の水は、河流を形成することなく地域に留まり続けた。この地域に滞留する水の中に、飛び地のように取り残される部分がある。この部分は他よりも僅かに高い土地であり、その中に

は周りを壁らしきもので囲まれた村落が存在している。このような村落を「圩寨」「围寨」という。19世紀半ばの中国では太平天国の反乱などの混戦が顕在化していた。華北では捻軍、捻匪という集団が活動し、地域社会内での対立が深刻化していった。この捻軍が生まれてきたのが安徽省北部、江蘇省北東部、河南省東部、『新黄河流域図』の範囲で言えば下流一帯の地域である。捻軍はそれを生み出した地域社会にも大きな破壊をもたらし、捻軍とそれに対抗する勢力のそれぞれが掘って立つ村落や砦に「圩」を築いた。この圩とは、土をもり立てて作った壁で周りを取り囲み、その壁の外側に壕を巡らせる形状をとっている。四隅など要所に望楼を建て、敵勢力が到来すれば圩の中に立てこもりこれに対処するのである。地域社会における圩寨の分布、築造年、規模、並びにその出現の背景については野崎要氏と吉尾寛氏が地方志などの文献を用いて考察している⁽²⁴⁾。吉尾氏は太和県、野崎氏は江蘇省徐州府の銅山県、沛県、豊県、睢寧県、宿遷県をそれぞれ対象として一つの県の中で圩寨がどのような場にあるのかを明らかにしている。しかしながら圩寨の相互の位置関係については、詳細な地図がなければ具体的に認識し難かった。

『新黄河流域図』の原図となった中華民国作製の5万分の1地形図にはこのような圩寨が数多く描かれている。残念ながらこれらの土壁はこの黄河の氾濫とその後の時間の経過によって崩壊と撤去が進み現在ほとんど残存していない。現状では僅かに周囲の壕だけを目にするのみである。これに対して本図には洪水到来前の地域社会に分布する圩寨や围寨の姿がはっきりと描出されている。この地図に各県の地方志に記される村落の情報を対照させることによって地域社会における圩寨の分布が明らかとなる。例えば筆者のフィールドである安徽省太和県の地方志、1925年刊行の民国版『太和県志』巻一「輿地志一・区堡」には各区の村落、圩寨の有無と大小、築造年月が記されている。『新黄河流域図』で言えば「秋渠集」「界首集」「双浮屠」の図幅の範囲である。この地方志からは清代の各区における圩寨の状況、当該地図からは民国期の村落の位置と形状が判明する。さらに現在公開されているグーグル、百度などの衛星画像を利用すれば、圩寨の現況が確認されるのである。また既述の通り本図の滞留する水流の状況から当該地区の土地の僅かな高低が見えた。他の地形図ではほとんど標高差があるようには見受けられないが、当地の村落が周囲よりもやや高い場所を選んでつくられている立地状況を読み取ることが出来るのである。

以上の諸点において『新黄河流域図』は様々な角度から当該地域の歴史・地理を研究する糸口を提供してくれるのである。

附：2015年10月安徽省阜陽市太和県訪問記

2015年10月、筆者は安徽省阜陽市太和県を訪問した。その目的は民国版『太和県志』巻一・区堡に記される圩寨と『新黄河流域図』とを対照し、併せて現況を観察することにある。南京での別の用務の都合上⁽²⁵⁾、太和での調査は実質一日に限定されたため、訪問する圩寨は県北のZ寨と県南のX寨の2箇所とした。ただし『新黄河流域図』は太和県の北部までを対象地域としており、X寨は残念ながらその範囲から外れている。X寨については現況の確認に止まった。

太和县は安徽省を東西に横断する鉄道の沿線にある。太和駅はかつて旅客の取扱を行っていたが、鉄道の高速化と道路網の整備により現在当駅に停車する列車はない。河南省へと向かう列車は、阜陽の次は河南省との省境にある界首市——かつては太和县の中の一つの鎮であった——に停車する。それ故、太和に行くには一般的には阜陽へ行き、そこからバスに乗り換えることとなる。ただし今回は時間節約のため夜行列車を利用し、一旦河南省商邱市へと向かい、そこから南下して安徽省亳州を経て太和县に入ることとした。目下、太和县も高速鉄道の建設が始まっているが、その開業年は不明である。

10月15日22時50分鄭州行き急行列車にて南京を発ち商邱に向かった。16日朝6時過ぎに河南省商邱に到着、早速駅前のバスターミナルにて太和行きのバスを探した。太和終着のバスはないが、阜陽行きが太和を経由するという。7時発のバスは定刻よりやや遅れて出発した。

商邱より亳州への道は、20年前に通ったことがある。山東省の済寧から一日かけて亳州まで。当時はどこまでも田園風景が広がり、バス道路も片側一車線の並木道でしかなかった。今は大きく道幅を拡げ舗装も新しくなり、その両側に新たに建設された工場などが連なる。バスの速度も昔に比べれば2倍以上も速く、知らぬ間に河南省から安徽省へと入った。9時頃バスは亳州市街を通り過ぎて更に南下する。10時頃亳州市南端の淝河鎮に到着。鎮の北西に河南省との省境がある。低層の建物が路の両側に建ち並び、その前には様々な物品を売る市場が開かれている。近隣の町や村とを結ぶミニバスと輪タクの群、雲集する人びと、喧噪がすさまじい。バスはその間をゆっくりと進んでいく。その町並みと混雑が途切れぬまま、阜陽市太和县の桑營鎮の町へと入った。ここは河南省、安徽省亳州、太和が境を接することから両省三県の交界地と称される。

11時頃太和县の中心に到着した。まずはバスターミナル近くに宿舎を確保し街に出た。路線バスの案内表示から県城には「汽車北站」と「汽車南站」の二つのバスターミナルがあることが分かった。宿舎近くのそれは南站であったので、偵察を兼ねて汽車北站へと向かう。北站にはそれらしい建物はなかったが、広場に多くのミニバスがならんでいる。その中にL鎮を行き先表示板に掲げたバスがあった。L鎮はZ寨の最寄りの鎮であるので乗り込んだ。運賃は10元。

バスは一時間ほどでL鎮に到着した。ここから先のミニバスはなく、輪タクが数台客待ちをしているだけである。仕方なく輪タクと交渉し、10円で街道沿いのS村まで行くこととする。そこから舗装されていない村道を徒歩で1.5~6kmすすんだところにZ寨があるはずだ。位置関係の把握には印刷したグーグルと百度の衛星写真と地図を利用した。前者にはあぜ道のような農道も描かれており、迷うことなく目的地に辿り着くことが出来た。

民国版『太和县志』巻一・区堡によればZ寨の修築は咸豊5年（1856年）、規模は広袤320丈つまり周囲約1,060mである。『新黄河流域図』にはその圩寨の形状は二重に描かれている。望楼と城門らしきものが描かれているので、本来は土壁があったと考えられる。実際Z寨の周囲は幅約10mの壕で囲まれていた。一辺は南北方向に約300m、東西方向に約350mという方形である。『太和县志』の記述よりやや大きい。集落はこの壕の中にある。約50m進むと再び壕があった。これも方形をしている。図13の直線はその縁を図示したものである。南北方向に170m、東西方向に約200mである。かつて存在していたはずの土壁はすでに失われている。Z寨に限らず圩の

壁はどの村落でもほぼ消滅しているようである。外側の壕から内側の壕へ向かってやや上り坂となっており、村の中央部が微高地となっていた。『新黄河流域図』でも氾濫した河水の中にところどころ村落が島のように取り残されていた。もともと淮北は水害の多発地帯であり、有力宗族などは可能であれば周囲よりも高い地形を選らんで村落を築いていたと考えられる。



図11 新黄河流域図（一部）



図12 Z寨遠景



図13 Z寨の圩

Z寨より農道を通り別の街道に出る。ここもミニバスは通っていないようだ。L鎮まで4~5kmを歩く。途中の村々の周囲にも圩の痕跡が見られる。『太和県志』巻一のリストには掲載されていない圩寨も数多くあったようだ。夕方L鎮から再び太和県城へ。

17日午前県南のX寨へ行く。県城中心より距離にして6kmほどであり、歩くこととした。路は片側一車線の昔ながらの道路で、埃っぽくトラックが行き交う。途中何台かのバスとすれ違う。この路は近隣のD鎮と県城をつなぐ幹線道路である。X寨まで約1時間30分。民国版『太和県志』によれば、広表400丈（周囲約1,320m）、築造は咸豊6年（1856年）である。

まず道路南側のX小寨を訪れた。ここは小規模な圩寨であり『太和県志』にはその名前を見ることが出来ない。集落の外側に壕はなく、その中心の一角のみ圩が築かれていたようである。ここでも土壁はすでに失われており、壕の一边は80~100m程度である。戦乱の際には村人はこの中に集まり立てこもったのだろう。近隣に大きな圩があったとしても、それぞれの村落に圩寨を築く傾向にあったことが窺い知れる。続いてX寨まで歩く。X小寨から北西へ約400m離れている。X寨は先ほど通ってきた幹線道路の北側にあった。圩寨の南端はこの道路で破壊され、わずかに痕跡が残るのみである。壕は埋め立てられ残った部分もゴミためとなっていた。X寨の圩の規模は大きく、村落全体を取り囲んでいる。形状は方形、一边が約300mはある。単純に考えて周囲約1,200m、こちらは『太和県志』の記述とほぼ一致する。村落内に入る。約150m進むと、また別の壕があった。X寨もZ寨と同様、村落内に圩を建設する二重構造になっていることがわかる。Z寨は丁度“回”の字のように真ん中に圩があるが、X寨の内部の右はやや北西に偏って築かれている。内側の圩の一边は150mほどである。

X寨を離れ太和県城に戻る。県城までのバスの運賃は3元。終点は汽車南駅のすぐ側だった。ここからは県南部への近郊バスが出ているようだ。阜陽などの都市へのバスも南駅から出発する。宿舎に戻り旅装を整えて再び南駅へ。阜陽の鉄道駅までのバスに乗った。阜陽までも1時間強と順調に到着。17時30分の上海行きの急行列車に乗車。途中、駅構内の売り子も車内販売も何もないのに驚く。列車は翌朝5時過ぎに上海に到着する予定であったが、定刻よりも20分以上早く着いた。5時のリムジンバスで浦東空港へ、そして9時発の春秋航空高松行きに乗って帰国、大学には午後3時半過ぎに到着した。

-
- (1)「新黄河流域図送付の件 (1) (2)」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. C04121878200、Ref. C04121878300、昭和15年 「陸支密大日記 第8号3/3」(防衛省防衛研究所)。
 - (2)『中国大陸五万分の一地図集成』第V巻、科学書院、1994年、2390-2416頁。
 - (3)今里悟之・久武哲也「在アメリカ外邦図の所蔵状況：議会図書館とアメリカ地理学会地図室の調査から」(小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域：「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会、2009年所収) 59頁。
 - (4)以上、すべて前掲「新黄河流域図送付の件 (1)」。
 - (5)『外邦図研究ニューズレター』11号、2014年10月 (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/geography/gaihouzou/newsletter11/>)。
 - (6)防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 支那事変陸軍作戦 (2) 昭和十四年九月まで』朝雲新聞社、1976年、第2章。
 - (7)渠長根「阻敵自衛、功過任評説：1938年花園口事件研究概覧」『軍事歴史研究』2003-2、2003年。
 - (8)中国においては研究、回想録の類いは数多く出版されている。また欧文では例えばDiana Lary, "The Waters Covered the Earth: China's War-Induced Natural Disasters", Mark Selden & Alvin Y. So (eds.), *War & State Terrorism*, Rowman & Littlefield, 2004. があるが、日本では専門的に論じた研究は少ない。小笠原強『日中戦争期における汪精衛政権の政策展開と実態』専修大学出版局、2014年、第4章「安徽省淮河堤防修復工事」が決潰後の汪精衛政権による堤防修築工事を論じている。
 - (9)太和県地方志編纂委員会編『太和県志』黄山書社、1993年、115～117頁。
 - (10)「航空兵团情報記録 (航空) 送付の件」JACAR Ref. C04120468200、昭和13年 「陸支密大日記 第39号」(防衛省防衛研究所)。
 - (11)「航空兵团情報記録 (地上) 送付の件」JACAR Ref. C04120460900、昭和13年 「陸支密大日記 第37号」(防衛省防衛研究所)。
 - (12)「航空兵团情報記録 (地上) 送付の件」JACAR Ref. C04120461000、昭和13年 「陸支密大日記 第37号」(防衛省防衛研究所)。
 - (13)「航空兵团情報記録 (地上) 送付の件」JACAR Ref. C04120461100、昭和13年 「陸支密大日記 第37号」(防衛省防衛研究所)。
 - (14)「航空兵团情報記録 (地上) 送付の件」それぞれJACAR Ref. C04120471200、昭和13年 「陸支密大日記 第39号」、Ref. C04120460100、昭和13年 「陸支密大日記 第37号」(ともに防衛省防衛研究所)。

- (15)陸軍次官東条英機宛『『黄河破堤ニヨル氾濫推移ニ就テ』送付の件』昭和13年6月24日、JACAR Ref. C04120431000、昭和13年「陸支密大日記 第33号」(防衛省防衛研究所)。
- (16)「方軍地資第33号 黄河氾濫其後の変化に就て 昭和13年9月25日 北支那方面軍司令部」JACAR Ref. C13032691400、地図はRef. C13032691500、ともに「黄河氾濫関係資料綴 昭和13年9月21日～14年2月11日」所収(防衛省防衛研究所)。
- (17)防衛庁防衛研修所戦史部『陸海軍年表』朝雲出版社、1980年、414頁。
- (18)「航空兵団情報記録(地上)送付の件」JACAR Ref. C04120479100、昭和13年「陸支密大日記 第39号」(防衛省防衛研究所)。
- (19)「方軍地資第38号 9月以降に於ける黄河氾濫の変化に就て送付の件」JACAR Ref. C04120614600、昭和13年「陸支密大日記61号」(防衛省防衛研究所)。
- (20)「方軍地資第5号 黄河決潰口偵察報告(主として三劉砦) 昭和14年2月11日 北支那方面軍司令部」JACAR Ref. C13032692600、「黄河氾濫関係資料綴 昭和13年9月21日～14年2月11日」所収(防衛省防衛研究所)。
- (21)「昭和13年度に於ける新黄河氾濫経過概況(其の1)送付の件」JACAR Ref. C04121393700、昭和14年「陸支受大日記 第61号」(防衛省防衛研究所)。
- (22)「新黄河飛行機偵察報告に関する件」JACAR Ref. C04122553300、昭和15年「陸支密大日記 第40号 1/3」(防衛省防衛研究所)。
- (23)「新黄河一般概況図(昭和16年度偵察)」JACAR Ref. C04123651400、昭和17年「陸支密大日記 第15号」(防衛省防衛研究所)。
- (24)野崎要「清朝後期の圩寨」『立正史学』108号、2010年。吉尾寛『『寨』をめぐる景観についての覚書：捻軍の乱における安徽省潁州府太和県を例にして』(同編『民衆反乱と中華世界：新しい中国史像の構築に向けて』汲古書院、2012年所収)。
- (25)その詳細については荒武達朗「秦淮区磨盤街社区の古民居群」(片山剛編『近代東アジア土地調査事業研究』大阪大学出版会、2017年所収)参照。

謝 辞：

アメリカ議会図書館所蔵の『新黄河流域図』と1939年12月北支方面軍参謀本部作製の『新黄河一般概況図』の画像と全般的な情報の提供については当館に勤めておられるミーンズ節子女史、並びに大阪大学名誉教授の小林茂氏、甲南大学文学部の鳴海邦匡准教授に大変お世話になりました。また本稿に掲載した『新黄河流域図』の図幅はワシントン大学に所蔵されるものであり、同大学の田中あずさ女史ならびに小林茂氏のご助力により利用を許されたものです。さらに『地図集成』所収のリプリント版の利用については大阪大学文学研究科の片山剛教授、ならびに山本一研究員にお世話になりました。以上の方々にはこの場を借りてお礼申し上げます。

本研究はJSPS科研費 課題番号：16K03088「内戦期華北地域社会における中国共産党の支配権確立過程：伝統社会からの転換」の成果の一つである。